2014 年度卒業研究概要

自然景観の選好要因に関する基礎的研究
-地域性に着目して-

田中　章　研究室

1131194　村尾　寛人

１．研究の背景と目的

画一的な開発により、景観は本来の姿を喪失し魅力が失われつつあるが、2004 年に景観法が制定されたこと等もあり、魅力的なまちづくり活動や、景観の整備・保全が活発化してきている（大石ら，2007）。しかし、ヒトが選好する景観やその要因や傾向は未だ解明されておらず、どのような景観を目指して整備・保全がなされていくべきかは、確立されていないという現状がある（丘ら，2005）。

清水（2014）は、ヒトは水辺エコトーンを含み、奥行きがある景観が選好する傾向があると明らかにした。これは、生物学的欲求を促す景観が選好されるというアップルトン（1996）と生物多様性が高く、生産性も高い、エコトーンを直感的に読み取りハビタットとしての適性度合いを判断するという田中（2006）の仮説を支持しているものである。さらに、エドワード・O・ウィルソン（1984）の、人間が潜在的に他の生物との結びつきを求める傾向、本能があることを提唱している、バイオフィーリア（生物愛）仮説を支持する結果でもある。

景観は、地域固有の自然、歴史、文化等の特性と密接に関連し、地域の生活や経済活動の環境を現すものであることから、地域ごとに多様な景観価値が形成されるものである（国土交通省，2007）。

イーフー・トゥワン（1961）は、人々と、場所あるいは環境との間の、情緒的な結びつきがあるとして、トポフィリア（場所愛）という概念を提唱している。また、涌井（2014）は、バイオフィーリアと、トポフィリアというものの真ん中に人間がいると、非常に安定し、安心で安全で、心地よい状態になると述べている。

本研究では、清水（2014）の研究の追実験を行う。さらに、特定の場所や環境とのつながりトポフィリアが、選好の傾向や要因にどのような影響をあたえるのか、実験調査及び分析を通して検証し考察することを目的とする。

２．研究方法

本研究では、2 種類の実験を東京都市大学横浜キャンパスの学生と、神奈川県三浦郡葉山町の在住者（環境フェスタ、葉山まちづくり展の来場者と南郷中学校 2 学年を対象）、エコプロダクツ展来場者を対象に、計 299 人に実施した。人間と土地や環境との間にどのようなつながりがあるのかを明らかにするために、山・海・川といった自然環境が現存している神奈川県三浦郡葉山町を対象とした。

単一回答方式による景観選好アンケート（実験 A）では、一度に 2 枚呈示される景観写真の比較を求めることで選好される景観の傾向を明らかにした。

景観を選好する際潜在的な要因を明らかにするために、被験者の心理反応を反映することができる SD 法（Semantic Differential scale）を用いて景観の印象評価アンケート（実験 B）を行った。6 枚の景観写真に対しての評価を求め、得られた結果に因子分析を行い、景観を選好する際の潜在的な要因を抽出した。評価内容は複数の形容詞対に対する 5 段階評価である（以上を一次実験の内容とする）。

一次実験の結果を踏まえ、新たに仮説を立て、実験刺激とアンケート用紙を改変し、実験 A、実験 B を行った（以上を二次実験の内容とする）。

３．研究結果

３－１．実験 A の回答結果

一次実験では水辺エコトーンが写されている景観写真と写されていない景観写真を比較する質問を 13 問設け、その内 8 問で水辺のある景観を選好する回答者が半数を超えた。また、一次実験の結果から奥行きが感じられる構成の景観が好まれる可能性が示唆された。

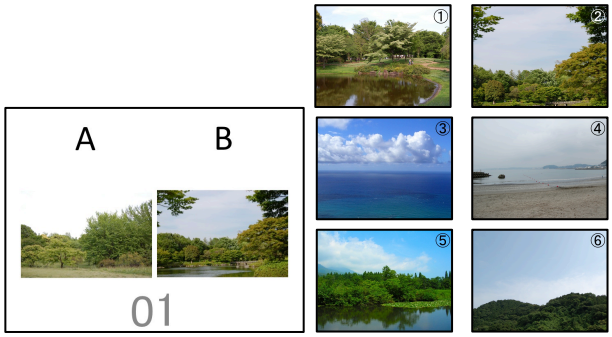

図１　一次実験で利用した写真の例（左実験 A の写真、右実験 B の写真）

表１　実験における被験者の数

	一次実験				二次実験			
	葉山町民	その他	葉山町民	その他	葉山町民	その他	葉山町民	その他
	男性		女性		男性		女性	
１０代	11	40	6	19	46	8	30	4
２０代	0	29	0	10	1	50	1	20
３０代	0	0	1	0	3	0	0	1
４０代	2	1	0	0	0	1	0	2
５０代	2	0	1	1	0	0	0	0
６０代	0	0	1	0	0	0	0	0
７０代～	7	0	1	0	0	0	0	0
合計	22	70	10	30	50	59	31	27
男女別合計	92		40		109		58	
総計	132				167			

被験者全体の 9.8%が選好　　被験者全体の 87.9%が選好

図 2　実験 A（一次実験）で水辺（エコトーン）が選好された例

図 3　実験 A（二次実験）で葉山被験者が葉山町の景観写真を選好した写真。（左 森戸海岸、右 森戸川河口付近）

葉山町在住者とその他の被験者で区分し、同様の分析をした結果、葉山町に在住する被験者は、葉山町の景観写真を使用したものが選好させる傾向が示唆された。

二次実験では、奥行きが感じられる景観と感じにくい景観を比較する質問を 3 問設けた。全ての設問で、奥行きが感じられる景観写真を選好する回答者が半数を超えた。また、葉山町の景観写真と葉山町でない景観写真を比較する質問を 10 問設けた。葉山町在住者は、その内 2 問で、葉山町の景観写真を選好する回答者が半数を超えた。呈示した景観写真は、森戸川河口付近のもの、森戸海岸の景観写真である。これは、葉山町景観計画（2010）に記載されている、葉山らしい景観とされている景観である。

３－２．実験 B の回答結果

実験で得られたデータに対し因子分析を行った結果、一次実験では「親近性」、「景観の良好さ」、「ハビタットとしての居住への適性」、「整然性」、「開放感」、「生命感」の 6 つの因子を、二次実験では「景観への愛着性」、「画像の良好さ」の 2 つの因子を新たに設定した。

４．結論と考察

実験 A では、一次実験の結果から水辺エコトーンが含まれる景観が選好される仮説を支持する結果が示された。また、被験者の育った環境や土地が景観の選好に、影響を与えていることが示唆されたため、これを仮説とした。二次実験では、この仮説を問う設問を設けた結果、被験者の選好傾向をみると、地域固有の景観において、この仮説が支持される結果が得られたと言える。ヒトと環境や土地との間に愛着や親近感を抱く景観は、地域固有の景観や、シンボルとなっている景観にあるということが示唆された。さらに、その様な感情が景観選好の際に働くと言える。

実験 B では、一次実験と二次実験の結果、8 つの因子を導くことができた。「ハビタットとしての適合性」因子は、呈示された景観のような場が生存に有利か否かを判断していることが考えられる。「景観への愛着性」因子は、呈示した景観とヒトの間に、愛着や親近感を抱き、判断していると考えられる。

これら 2 つの実験結果からヒトが選好する景観は、水辺エコトーンが含まれ且つその水辺エコトーンを含む景観構成要素によって奥行きを感じられるものであり、ヒトのハビタットとしての適性度合いと、環境や土地への愛着性が選好の大きな要因である事が明らかになった。また、これはアップルトン（1996）や、田中(2006)の仮説を支持する結果が得られたと言える。このことから、ヒトは遺伝子レベルで、生物多様性が高い水辺エコトーンを含む景観を本能的に選好するのではないかと考えられる。

また、地域固有の景観が選好される結果を考慮すると、生まれ育った環境や慣れ親しんだ環境によってヒトは自然景観に対する認識が異なることが考えられる。

日本の自然性を高める景観を整備・保全するためには、地域固有の水辺エコトーンを含む自然景観を景観行政団体などが行うことが有効であると考えられる。

本研究では、景観の評価を、写真を使用して行った。景観評価の研究は、視覚に重点を置かれる傾向がある。本研究の二次実験で得られた、「画像の良好さ」因子をみても、視覚以外の感覚器官から得られる情報というものも無視できないものであると考える。また、土地との情緒的なつながりトポフィリアは、視覚的な楽しみからくるものか、物理的接触からくる喜びなのか、あるいはそれ以外のものなのか、どういった理由から場所への愛を感じるのか、そのつながりを市町村もしくはそれ以上の細かい規模で着目し明らかにする必要があると考える。

さらに、都心部のような、人工的な構造物が含まれる景観においても、自然景観と同様の選好傾向が表れるのか、また人工的な構造物とヒトとの間に生まれる情緒的な感情を明らかにすることも重要な課題である。

【引用文献】

イーフー・トゥワン（1996）トポフィリア人間と環境．東京都．509pp

大石洋之、村川三郎、西名大作（2007）選好景観に対する被験者の心理的評価に関する分析．日本建築学会環境系論文集，Vol.618，p101-108

丘広大、坪井善道、本田正治（2005）景観法の運用手法に関する研究―『都市景観 100 選』の対象地区の選定基準の分析，その１―．http://ci.nii.ac.jp/els/110007072780.pdf，2013.5.21

児島隆政、古谷勝則、油井正昭（1995）自然景観における好ましさの評価構造に関する研究．ランドスケープ研究，Vol.58，p177-180

桜井善雄（1991）水辺の環境学～生きものとの共存～．新日本出版社，東京都，222pp

ジェイ・アップルトン（1996）風景の経験. 法政大学出版局, 東京都, 381pp.

田中章（2006）これからの景観アセスメント．JEAS ニュース，Vol.111，p18-19.

中屋紀子、田中章（2005）環境アセスメントにおける景観評価の現状と課題-ランドスケープ視点での景観評価システム構築に向けて-，環境アセスメント学会研究発表会要旨集，p121-126

葉山町（2010）葉山町景観計画，葉山町，27pp

涌井雅之（2014）いなしの智恵 日本社会は「自然と寄り添い」発展する．KK ベストセラーズ，東京都，435pp